
『SWORD OR SCYTHE』

稲木グラフィアス

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

『SWORD OR SCYTHE』

【Nコード】

N6184Y

【作者名】

稲木グラフィアス

【あらすじ】

その世界には、大きく分けて魔族、獣人族、魔法族の三種の民族が存在していた。

魔人の長は世界を手にとろうと勢力を拡げていた。

そんな世界の中で、人工的に能天使の加護を受けさせられた少年、久也。

大好きだった女の子を失ってもなお『強くなる』という約束を果たそうとするため、軍の特殊機関で力を追い求める。
追い求めた先に何があるのか。

約束を果たした後に待っているものとは何か。
不定期更新ですが、なるべく早く更新したいと思います。

第一話『殺戮兵器』

「大丈夫、さやちゃん？」

「ひつく・・・ごめん、僕が」

孤児院でいつも一緒だったほのかちゃんはとても優しくかった。

「よしよし、泣かない泣かない。大丈夫だから」

「でも」

「じゃあ、さやちゃんが大きくなったら、強くなって私を助けてね」

「うん、約束する！」

こういった具合に、ほのかちゃんは泣いている僕を慰めてくれたりした。

こんな関係がいつまでも続くと当時は思っていた。

「とくしゅのうりよくかいはず？」

ある日、僕は友達のおのかちゃんと一緒に遊んでいた。
そこを白衣を着た男の人が近づいてきた。

「おのかちゃん、特殊能力の研究をしたいので、ついて来てくれな

いか？」

「ほのかだけ？」

「そうだけど？」

その時、僕はほのかちゃんが、帰って来なくなるような気がした。だから、

「僕も行く！」

そう言ってしまった。

僕達は孤児であつたため、孤児院に入っている。

すでに孤児院からほのかちゃんを引き取る事を許可されていたらしく、僕は無理矢理ほのかちゃんについて行つた。

「さやちゃん見て、ほのか達と同じ位の子がいるよ」

「本当だ。後で皆で遊ぼう」

「うん！」

先生についていくと何処かの研究施設に着いた。施設の中には僕達と同じ位の歳の子供がいる。

施設に入つてすぐに初めの能力実験に入った。

実験が一段落すると同じ実験を別の子にもする。その間、他の子は皆で遊んでいる。

そして、全員の実験を終えると、数日休んで二番目の実験にうつる。

そんなことを繰り返していくのだった。

そして月日が経ち、俺は14歳になった。

先生の実験は日に日に被験者にかかる負荷が増していった。

そう。被験者に傷をつける程に。

「・・・・・・・・っ！」

「ほのか!？」

ほのかの体には、沢山の包帯が巻かれており、とても痛々しかった。

俺にも巻いてあるが、ほのか程ではない。

それどころか、ほのかの包帯はうっすらと赤色が、つまり血が滲んでいた。

「大、丈夫。傷が少し痛んだだけだから」

そう言っているほのかの顔は痛みに歪んでいる。

「だけじゃないだろ！ 血が！」

「心配性だなあ、久也は。・・・・・・・・小さい頃に約束したよね？」

強くなるって。同じ実験をしているんだもん、久也が大丈夫なら私も大丈夫だから」

「でも！」

俺は声を張り上げた。強くなる以前にほのかにいらなくなってほしくなかったから。

「先生の実験を終えて、強くなった久也の姿を見せてよ」

「・・・・・・・・くっ、分かった。約束する」

俺の頬を涙が伝う。

「ほら、泣かないで。泣いていたら、強そうじゃ・・・・・・・・・・ない・・・・・・・・・・」

そこまで言っただけは力無く倒れる。

「ほのか？ 先生っ！ 先生えっ！！」

俺が叫ぶと先生達はすぐにかけて、ほのかを何処かの部屋につれていった。

そして、しばらくして部屋から先生達が出てくる。俺はすぐに先生に聞いた。

「先生、ほのかは？」

「大丈夫、少し体調が悪いたけだから」

「治るんですね？」

先生はもう一度「大丈夫」と言う。

しかし、俺の中では嫌な予感がしていた。

「じゃあ、久也君。ほのかちゃんが治ったら、強くなった君を見せてあげられるように、最後の実験、頑張ろっか」

「・・・・・・・・はい」

そうして、最後の実験を受ける。

最後と言っただけあって、体にかかる負荷は結構なものだった。

「・・・・・・・・ううっ!!」

「辛いかい、久也君？　だけど、我慢してくれ」

しかし、決して弱音は吐かなかった。

ほのかに、強くなった所を見てもらいたかったから。

結果的に言うの実験は成功したらしい。

先生達の様子を見てわかる。

それに、証拠として自分の手に剣が出てくるイメージをすると、白い剣がだせるようになった。

剣と言っても両刃ではなく片方にしか刃がなく、それでも刀に似た形状をしていた。

「強く……………なっただよな？」

俺は「うんっ」と自問自答した。

「ほのか、見たらどをんな顔をするかな」

見回すが、周りには誰もいない。

俺は先生を探す事にした。

勿論、ほのかの様子を聞くためだ。

「先生、何処にいるのかな？」

探したが見当たらない。

歩き回っていると一つの部屋に行き着いた。

「ここは……………」

そこは先生達が、入ってはいけないと言っていた部屋だった。
残っている部屋はここだけなので、入ってみることにした。

コンコン……………。

返事がない。

俺はドアに手をかける。

ガチャッ……………。

「開いてる？」

入ってはいけないと言うわりにはなんて無用心なだろう。

俺は部屋の中に入ったがその中に入ったのは

「何だよ………これ」

中には化け物のようなモノがいた。

「オオオオオオオオオ」と鳴き声のようなものを発している。

「………うえっ」

あまりの見た目に吐き気を催す。

人型でありながら奇形のように顔のような部分が至る所から飛び出しているのもあれば、アメーバのように形が不定形のものもある。

最初は魔物かと思ったが、人型で服を着ているものがいた。自分とおなじ格好だ。

「………これって」

「おやおや、随分と失礼な子だね」

後ろから先生の声が聞こえたので振り替える。

先生はニヤリと笑っている。

「………先生」

「君は一緒に遊んでいた子のことも忘れたのかい？」

「遊んでいた？」

この化け物の山が皆、人の子だというのはか！？
いや、待て

「ほのかは！？」

「『ほのか』？」

先生はしばらく考えて、思い出したように言う。

「ああ、あの不良品の事か」

「……不良品？」

俺は何が何だか分からなくなった。
ただ、ほのかに会いたかった。

そうでないとうにかなっていまいそうで。

「何処？ ほのかは何処？」

先生は相変わらずニヤニヤと笑っている。

やめろ。そんなふうに笑うな。
そう思った俺に先生は、

「ゴミはどうするか、わかっているだろう？ 君以外はまったくの
ゴミ素材だったよ。『実験の負荷に耐えきれなくなったゴミ』や『
実験で細胞が崩壊して化け物に成り果てるゴミ』とかね」

やめる。ほのかはゴミなんかじゃない！

「ここまでの道のりは長かった。」

先生は呟く。

「期待していたサンプルも駄目になり、私達の実験は失敗に終わるのかと思っただが、ようやく完成品を手に入れることができた。」

「俺達に何をした？」

俺がそう言うと、先生は背を向ける。

「君は『九天使の加護』というものを知っているかい？」

九天使の加護。それはその名の通り天使からの加護のことで、天使の第一位から第九位、つまり熾、智、座、主、力、能、権、大天使、天使からの九種類の加護がある。

九種類の加護にはそれぞれ違う能力があり、それぞれがとても強力な加護である。

天使の加護は15年に一度、世界中の九人の子供がそれぞれの加護を受けて生まれてくる。

「私達は九天使のなかで最も戦闘向きの加護、能天使の加護を人工的に受けさせる研究をしていたんだ」

俺は何も言えなくなっていて、ただ先生の話聞いていた。

「うあああああああああああああああああああああ
あああああ！」

俺は叫んだ。

怒り、悲しみ、怨み、哀れみの負の感情が入り混じった叫びだった。

突然、俺の手に黒い鎖鎌が現れる。

俺はその鎌で目の前の先生の体を真つ二つに切り裂いた。

ビシャアアと周りが赤く染まる。

「うっ……あぁ……」

俺の叫びに驚いて他の先生達が部屋に入ってくる。

「い、いねは……！」

「に、逃げっ！」

ド
ス
ッ
！

その瞬間、一人の先生の体に俺が降り下ろした鎌が串刺しになる。

俺が思いつきり鎌を引くと、その先生の体は背中の刺さつた所から二つにわかれた。

一瞬で研究施設の中が騒がしくなる。

そこからは、逃げる先生達が一人づつ真つ二つにされていくとい
う殺戮が始まった。

「うくっ………っ」

俺は雨が降る中、1人泣いていた。

『よしよし、泣かない泣かない。大丈夫だから』

そんな中、

ほのかの言葉が浮かんでくる。

「ごめん………俺が助けるって約束したのに。守ってやれな
くて……ごめん」

『じゃあ、さやちゃんが大きくなったら、強くなって私を助けてね』

「うん、強くなる。……誰よりも、絶対に」

だから、見ていてくれよな。

「約束………な？」

俺の頬をつたう液体はもう、涙ではなくなっていた。

第一話『殺戮兵器』（後書き）

学生なので更新が遅くなりますが、どうぞよろしくお願いいたします。

水面さんの感想を参考に改稿しました。

『水面さん』の感想を読ませていただきました。参考にさせていただきます。

ありがとうございます。

登場人物設定『主人公』

名前：楠木 くすき 久也 ひさや

容姿：（15歳時）黒髪ショートヘア、黒眼。背は168？。

武装：純白の剣

漆黒の鎖鎌

アサルトライフル（89式5・56mm魔装小銃）↑軍の特殊育成
機関から支給される銃。

デザートイーグル・50AE（魔装型）

人工的に能天使の加護を受けさせられた少年。大好きだった女の子、『ほのか』を人工的に能天使の加護を受けさせるという研究で失い、その怒りに身を任せて研究に携わった人を殺し尽くし、その研究所をも完全に破壊した後に『エドワード・グレイス』に拾われる。

> i 3 5 5 0 4 — 4 4 6 8 <

登場人物設定『主人公』（後書き）

楠木久也の容姿が書けました。自分のイメージ的にこんな感じですよ。

この他に学校で友達と一緒にリレーで書いてる『GATE』って作品でもナナと光というキャラも書きました。そっちの方も読んでください。

第二話『家族』

「・・・・・・・・」

俺は雨の降るなかを歩いていた。

冷たい雨は体温を奪い、疲労を与える。

研究所を破壊した後、俺は町を目指していた。

道を歩いていたら魔物が飛び出してきたので、今も白い剣と黒い鎖鎌は手に持ったままだ。

しばらく歩いていると、滝が流れている所に出た。

滝の裏は大きく窪んでいて、雨を凌ぐには充分だった。

空は灰色から黒に変わり始めていて気温は更に下がっていた。

明日、この川を辿っていけば人の居るところに着くはずと思い、俺はこの窪みで一晩を過ごすことにした。

火が欲しい所だが、木の枝は雨で湿っているし、上手く火を起さず自信がない。

仕方ないので、窪みの奥の方で丸くなることにした。

「おやす・・・・・・・・」

そこまで言っただけで気がつく。

「誰も・・・・・・・・いないんだよな」

孤児院にいた頃はほのかが『おやすみ』といって、俺も同じように返していた。研究所にいた時も。

冷たい雨、湿っぽい地面。

聞こえるのは滝が流れ落ちる音と雨の音。

「・・・・・・・・」

相当疲労が貯まっていたのか眼を閉じると、すぐに眠ってしまった。

チュンチュン

「ん？」

俺は太陽の光で目を覚ます。

しかし、何故か冷たい地面で寝ていた筈なのに、俺の体はとても暖かった。

「・・・・・・・・っ！」

完全に覚醒する。

俺は何処かの家の中のベッドに寝かされていた。

「……は？」

いつの間にか着ている服が変わっている。

ベッドから身をお越し、周りを見渡す。
だが、誰もいない。

ガチャッ

ドアが開く音がした方向に身構える。

「そんなふうに身構えないでちょうだい」

部屋に入って来たのは女の人だった。
もしかしてこの人が俺を助けたのか？

「・・・・・・・・」

「警戒しなくても大丈夫よ。とって食う訳じゃないんだし。……
・・はい、まずはこれ食いな」

その女の人は俺にスープが入った皿とスプーンを出してくる。

「・・・・・・・・スープ」

「冷めない内に食べなよ」

研究所を破壊した後から何も食べてなかった俺は腹が減っていた
ので、そのスープを喜んで頂いた。

「まる二日寝てたからお腹すいたでしょ」

「まる二日!？」

あんなところで寝てたからだろうか。

もし、助けてもらえなかったら、あそこでどうなっていただろう。

「食べながらでいいからさあ」

その女の人はスープを食べているのを見ながら、質問する。

「なんで、滝の裏なんかで寝てたのさ？」

「それは……………」

俺は研究所ことを話そうとした。

しかし、信じてもらえるだろうか。

話した所で

『冗談言っんでないよ』

と、返されそうだ。

「えっと、道に迷って」

「ふん？」

女の人は俺に疑いの目を向ける。

「冗談言っんでないよ」

俺の嘘はバレていた。

「嘘つくと、すぐに分かるんだから。伊達に母親やってないよ」

嘘をつくとすぐに分かるとなると本当の事を言つか、黙秘しかないか？

研究所にいた頃から思っていたけど、あの研究所は小さいものはなかった。

ならば、それなりの研究資金が必要だ。

それに、あんな研究施設を魔人族が放って置くはずかない。

たまたま、見つかっていなかったからかもしれないが。

「疑いませんか？」

「聞いてからにするよ」

「・・・・・・・・」

そんなことを言われたら言いにくくなるじゃないか。

「冗談よ、信じてあげるから」

「はい」

俺は研究所の事、その研究所を破壊した事を話した。

しかし、天使の加護のことは伏せておいた。

話を聞いた女の人は「ふうん」と納得した表情をした。

「もしかして、あれの事かな？」

そう言うと、女の方は部屋を出ていく。

俺はその内にスープを食べきった。

「・・・・・・・・ふう」

ガチャッ

俺がスープを食べ終わると同時に女の方が部屋に入ってくる。

今度は新聞を持っている。

「あなたが言った研究所ってこの事？」

そう言って、女の方が持ってきた新聞には見覚えのある風景が載っていた。

しかし、天使の加護云々ではなく、魔族に対抗する新型兵器の研究と記載されている。

一般に公開したくないのだろう。

「違う」

「そうなの？」

「いや、俺が破壊したのはこの写真の研究所だと思います。見覚えがありますし。でも、俺が破壊した研究所が研究していたのは、天使の加護を人工的に受けさせるというもの……あ」

しまった、言ってしまった。

なんで今、言っちゃったんだ？

バンツ！！

「今のは本当か！？」

いきなり男の人が部屋に駆け込んで来た。

「あんた」

「君、今言ったことは本当なのか？」

男の人は凄い勢いで詰め寄って来る。

女の人が『あんた』と言ったあたり、男の人と女の方は夫婦なのだろう。

「えっと……あの」

「こら、あんた。この子も驚いてるじゃないの」

「す、すまん」

どうしようか迷っていた俺を見て女の方は、俺に詰め寄っていた

男の人を俺から離す。

「えっと、天使の加護のことは本当です。俺は能天使の加護を受けています。」

証拠のために白い剣を出して見せる。

それを見て二人は目を見開き、開いた口が塞がらないといった様子になっていた。

「うーん」

「な、なんですか？」

男の人はなにやら考え始める。

「天使の加護を受けている人は珍しくない。でも、君の話だと君自信、裏の事情を知っている事になるね」

「はい……………」

やがて、夫婦二人でなにか話し始めた。

すると二人の意見が一致したように同時に頷く。

「なら、ここにいい」とい

「はあ!?!」

予想外の言葉に声が裏返る。

何を言い出すんだこの人は。

裏の事情を知ってしまった俺の存在を、その裏の人が知ってしまったら何をされるかわからない。

勿論、俺を匿ったりすればただではすまないだろう。

「なんで、そうなるんですか？」

「大丈夫だ。私はこれでも軍の特殊育成機関の教官でね、君ひとり増えてもちゃんと家族みんなで充分な暮らしはできる。」

「そんなこと聞いてません。なんで、俺を匿うんですか？」

まあまあと女の人が俺を落ち着かせる。

そして、食べ終えていたスープレの皿を片付けた。

「私はそこまで偉い立場じゃないから君を助けてあげられるのはほんの少しだけ。残りは自分でどうにかすることだ。君は天使の加護を受けてまだ間もない。なら、私がいる軍の特殊育成機関について、力をつけたらどうだ？」

「だから、なんでそこまで？」

「私はね、面倒なことに首を突っ込むのが好きでね」

「そうよ。この人は昔からよく面倒事に巻き込まれるの。でも、退屈しないわ」

夫婦二人はどう意見のようだ。

完敗だ。なんて、返したらいいか分からなくなった。

まあ、断って出たってでも止められないだろうが、どこにも行く宛がないのでお世話になるのは結構だ。

それに、強くなるために軍の特殊育成機関で力をつけるのはいいことだ。

「ありがとうございます。えっと」

「エドワード・グレイスだ」

「サニー・グレイスよ。後、娘のモニカがいるわ」

「あ、はい。楠木久也です。今後、よろしくお願いします」

第二話『家族』（後書き）

主人公設定のところに主人公のイメージを書きました。

第三話『試験勉強 接近戦闘編』

俺がグレイス家にお世話になって1ヶ月がたち、エドワードさんが言った軍の特殊育成機関に入るため、入隊試験の勉強をしていた。

「はああああ！」

俺は今、グレイス家の一人娘モニカと一緒にエドワードさんに試験の第一科目『戦闘技術』について教えてもらっている。

俺達は木剣を使っていた。

モニカは俺と同じ年らしく、親が教官なので、軍の特殊育成機関に入るため練習をしてきたらしい。

「そこっ！」

俺は大振りなモニカの隙について木剣をモニカの脇腹に叩き入れる。

一応、革の鎧を身に付けているが多少の痛みが伴うはずだ。

「くうっ！」

苦しそうに顔を歪め、踞るモニカ。

「大丈夫か！？」

「モニカ！？」

俺とエドワードさんは心配して駆け寄る。
すると、

「隙ありっ!」

反射で避けようとするがモニカの木剣は俺の脛に当たり、『力
コーン!』と乾いた音が響いた。

「いっつったああ!」

俺はあまりの痛さに転げ回る。

「足がああああ!」

弁慶の泣き所を木剣で思いっきり叩かれたのだ。痛くない何て言
うやつがいても俺は信じない。

「油断禁物って事よ」

「卑怯な!」

「戦争にはルールがないのよ」

なんてやつだ。

分かった。そっちがその気ならこっちだって、

「モニカ! もう一度勝負だ」

「いいわよ、受けてたつわ。その代わり負けた方は何でも一つ、勝
った方の言うことを聞くこと!」

「俺はいいぜ。いいですよ、エドワードさん?」

このやり取りは一週間程前から繰り返していた。

やり取りの発端はモニカからだった。

今と同じように戦闘技術を教えてもらっているときに、なんとモニカは俺に向けて木剣をぶん投げてきた。

とっさの事に反応できず、木剣は俺の顔面に直撃。

そこからは、怒った俺がもう一度といって、あのやり取りになる。

「いつもの事だろ? どうぞ」

エドワードさんは何気無い顔で言う。

エドワードさんは最初は止めたが、俺達の勢いに負けて、今ではこんな感じだ。

「その約束、後悔すんなよ?」

「その言葉、そのまんま返すわ」

俺達是对峙して睨み合う。

数秒の間の後、先に動いたのはモニカだった。

「ええええい!」

「はっ!」

俺はモニカの斬撃を木剣で受け止める。
競り合いながら俺達は睨み合う。

「いつもこのパターンね」

「なら変えてみたらどうだ？」

「言われなくてもっ！」

モニカは木剣を弾くと、今度は木剣を横に薙ぐ。

「くっ！」

俺はそれをバックステップで躲すと、今度は俺から斬り掛かる。

モニカは体を反らして躲し、距離をとる。

「今日は調子がいいわ」

再び対峙する。

俺の斬撃を躲すのはいつもの事。

しかし、そこから距離をとるのは初めてだ。

「今度は俺からっ！」

俺は木剣をしっかりと握ると、モニカに斬り掛かる。
モニカはそれを弾くと、今度はモニカが斬り掛かる。
しかし、俺は弾かれた後、一定の距離をとったので、モニカの斬撃は空を切った。

「あつぶね」

「そつちもパターンを変えたのね」

「当たり前だ。パターンを変えた相手に合わせて、変えてるからなつ！」

俺は木剣を横に薙ぐ。

モニカはそれを弾いて斬り掛かろうとするが、俺の体は再び一定の距離をとっていた。

ヒットアンドアウェイというやつだ。

「何逃げてんのよ！」

「逃げてないぞ？ 立派な戦術だ」

「ヒットアンドアウェイね。面倒な真似を」

そう言うと、モニカは木剣を構え直し、「ふう」息を吐く。

「来なさい！」

「そう言われなくてもそのつもりだ」

俺はモニカに斬りかかる。

だが、今度は離れるつもりはない。

「おりゃあー！」

「ふっ！」

モニカは俺の斬撃を躲す。

それに合わせて俺は慣性の法則に逆らい、モニカに斬りかかる。

「もらった！」

「……………」

しかし、モニカはそれも躲す。

「なっ？」

「えええい！」

俺の木剣はモニカの斬撃で弾かれる。

モニカの攻撃は大振りだが、一回集中すると集中が途切れるまでは、物凄い反射を見せる。

それを忘れていた。

モニカとの戦闘で一番気を付けなければならない所だというのに。

俺はその動きに反応できず、モニカの木剣が胸部に当たる。

「うぐっ！」

俺は胸部の痛みに踞る。

「私の勝ちね。さて、何をさせようかしら」

モニカは俺に勝った余韻に浸りながら『約束』の事を考える。

モニカが踞った時に心配して駆け寄るじゃなかった。
二重の意味で。

「もう少し敗者を労ったらどうだ？」

「何よ。負け惜しみ？」

この女ー！（怒）

「これで勝ったと思うなよ！」

「それ、負け役の台詞」

ぐっ、言い返せん。

だが、今度勝負する時は負けないように対策を練っておくか。

モニカの集中した時、どうやって気を逸らすかか？

こうして、負けた方は次にどうやって勝つか、勝った方は負けな
いように練習をする、というのを繰り返していくのだった。

登場人物設定 『ヒロイン』

名前：モニカ・グレイス

容姿：（15歳時）金髪、ショートヘア、碧眼、背は165？

武装：ロングソード（独自の魔術で強化してある）

シールド（ロングソードと同じく魔術で強化してある）

アサルトライフル（89式5・56mm魔装小銃）↑軍の特殊育成機関から支給されるもの。

グレイス家の一人娘。先代から強い魔術耐性を持っている家系で、攻撃魔術を主な攻撃手段としている相手にとってはかなりの脅威。久也とは互いにライバル視している。だが、同時に心を寄せる場面もある。

第四話『試験勉強 魔術編』

試験第二科目、『魔術』

エドワードさんが所属している育成機関は、対魔族のために結成された機関だ。

魔術を使う魔族達に対して、魔術で対応する。

だが、グレイス家は先代から『魔術耐性』が強いらしい。

そのため、『攻撃魔術』は使えない。

しかし、自身を強化する『強化魔術』は使えるらしい。

それに比べ、俺は

「ふんっ・・・・・・・・だぁ！」

「何で力んでるのよ。ただのイメージなのよ？」

人には保有魔力量というものがあって、人によって最大魔力量は違うが、俺のように天使の加護を受けている人は膨大な魔力を保有しているらしい。

また、魔術には魔法属性があつて、属性によって使える使えないがあるが、天使の加護を受けている人は『飛行』の魔術が使えるらしい。

魔術のコツは自分の頭の中でイメージを固め、呪文を唱えること。

簡単そうに思えて、実際にやってみると、とても難しい。

天使の加護を受けている人ならできるはずの『飛行』の魔術に挑戦している。

「……………、飛翔^{フガ・イク}せよ！」

しかし、なにも起こらない。
普通ならフワッと飛べるようになるらしいが。

「くそっ、もう一度っ！」

目を閉じてイメージをする。

地面からフワッと、重力が無くなったように体が軽く……………。

「……………、飛翔^{フガ・イク}せよ！」

「……………っぷ」

なにも起こらないのに、モニカの吹き出す声ははっきりと聞こえた。

悔しいな。何としても成功させたいものだ。

なんでなにも起こらないのだろうか。
俺は人工的に天使の加護を受けているが、加護を受けていることに変わりはないはず。

呪文が違ったのかな？

「呪文って、飛翔^{フガ・イク}せよであってるよな？」

「多分ね」

モニカはどうでもよさげに返事を返す。
本気でどうでもいいんだろう。

「………跳躍^{シ・サルトム}せよ！」

そう唱えると力いっぱい地面を蹴る。
すると、体が地面から高くジャンプする。

跳ぶ事はできるんだけどな。

だが、

「飛翔^{フガ・イク}せよ！」

飛行の呪文は成功しない。

俺の体はフワッと飛べるようにならずに地面に落ちる。

「止まれ^{ストップ}！」

俺の体は地面に落ちる事なく、空中で停止する。

だが、これは止まっているだけであって飛んでいるわけではない。
これではいいだ。

俺はスブシストを解くと、地面に着地する。

スブシストは元々敵に向かってかける魔術だ。

敵に向かってかけるとその動きを止めることができる。

だが、ある程度の魔力があったり、得意属性だったりすると効果は無い。

難易度の低い魔術だしな。

ちなみに、スブシストは風属性だ。

「なんで、できないんだ？」

「さあね。コンバリス・コルプス身体強化ができればそれでいいんじゃない？」

コンバリス・コルプスは自身の体を強化する魔術だ。

コンバリス・コルプスを使うことで超人的な身体能力を得ることができる。

ある程度の魔力があれば誰でもできる無属性魔術なのだ。

また、魔術は集中力を失うと強制解除されてしまう。

「俺はお前みたいな集中力は無いんだよ」

「え、負けを認めるの？」

「違えよ、馬鹿」

モニカは驚異的な集中力を持っているが、俺にはそれが無い。

この際、空を飛べなくていい。
空を自由に動き回れればいい。

「あ……………」

「何？」

「試してみるか」

俺はまた、目を閉じてイメージをする。

今度はフワッと飛べるようになるんじゃない。
空中で跳び回るのだ。

空気を蹴る俺の姿をイメージする。

ベス・ヒナトウス
「翼の足っ！」

俺はジャンプする。

そして何も無い所に踏み場をイメージする。

そこに、足をつけると……………、

「おっ？」

「えっ？」

俺の体は空中に立っていた。

何も無いのに、『そこに立っている』というのは、違和感があるな。

「おおっ？」

次に他の場所にも踏み場をイメージし、そこに足をやると

「よしっ！」

確かに手応え、いや足応えがあった。

トントントンと空中を歩く。

「できた！」

「『飛んでる』というより『歩いてる』ね」

モニカの声は俺には届かない。

何故なら、俺は見えない踏み場を歩いて空に登っているのだ。

俺は地上に戻ると、

「っしゃあ！ アイ、キャン、フラアアアイ！！」

と、叫んだ。

「飛んでないじゃん！」

モニカが突っ込む。

「いや、跳んだ」

「字の違いでしょ！」

「似たようなものだろ？」

「全く違うわっ、発音以外」

これで俺も空中で戦うことができる。

俺が喜んでいると、エドワードさんが「できたのか？」と言って家からでてくる。

「はいっ！ できました」

モニカは「できたのかなあ」と納得していないようだ。

「よし、じゃあまた模擬戦でもするのか？」

「………あ」

俺らは一緒の家に住んでいるとは言え、勝負をしている内にだんだんお互いをライバル視していた。

今は模擬戦をするつもりはなかったが、エドワードさんの言葉で意見が一致した。

「モニカ」

「いいわよ？」

俺達はエドワードさんから木剣を受けとると互いに構える。

「ルールはいつものやつに魔術をプラスしたのでいいよな」

「致死性のあるのはダメよ？」

「分かってるって」

「コンバリス・コルプス
「身体強化っ！」」

俺達は同時に唱え、斬りかかる。

モニカは跳躍し、俺はさっきできるようになった魔術を使う。

ペス・ピナトウス
「翼の足っ！」

コンバリス・コルプスとペス・ピナトウスのコンボで、俺は空高く跳び上がる。

「えええい！」

「はあああ！」

木剣同士がぶつかり合う。

モニカは空中で停止する魔術を使ってないので地面に着地する。

「やっぱりジャンプじゃ不利かなあ？」

そう言つとモニカは目を閉じる。

ベス・ピナトウス
「翼の足っ！」

「なっ！？」

なんとモニカは俺と同じ魔術を使つてきた。

「お前！ それ、できたのか？」

「見てたからね。これでフェアよ」

小癪な。

俺はモニカに斬りかかる。

モニカはそれを受け流す。

「はっ！」

受け流された直後にくるモニカの斬撃を、俺は見えない踏み場を跳んで躲す。

だが、それだけでは終わらない。

モニカは俺が躲した先を読んでいたように、木剣を振る。

さすがの集中力と言ったところか。

モニカの斬撃をギリギリで防ぐが、すぐに次の斬撃が来ると思いきや、モニカは回し蹴りを繰り返す。

「ぐふっ」

革の鎧越しに蹴りの衝撃が響く。

俺は魔術を強制解除される。

魔術を強制解除されて、俺の体は地面に向かって降下する。

だが、強制解除されたなら、また使用すればいい。

魔術を主な攻撃手段としている人と違って、俺は主に剣で戦う。

ある程度なら連続使用しても、保有魔力が尽きる事はないだろう。

「ベス・ヒナトウス
翼の足っ！」

ウルジエント・ケイエルムを再び使用し、空中に立つ。

そしてモニカの方を見る。

「はあっ！」

モニカは俺がウルジエント・ケイエルムを使用するのと同時に斬りかかってくる。

「くっ！」

俺は地面に降りる。

同じようにモニカも地面に降りる。

「コンバリス・コルプス
身体強化」

再び自分の体を強化する。

「はあああ！」

「てやああああ！」

俺達は同時に斬りかかる。

木剣で競り合うと、身体強化で得た身体能力のせいで、木剣がギシギシと軋む。

「流石に木剣が耐えられないな」

「なら、勝負をつける？」

「もちろん。……加速せよっ！」
シ・アクセレラチオ

その瞬間、周りの動きが遅くなって見えた。

シ・アクセレラチオは自身の体感時間を速める魔術。
だから、周りの動きが遅くなって見えたのだ。

しかも、コンバリス・コルプスと平行して使用することでコンボとなり、身体能力が更に向上する。

だが、それゆえに体にかかる負担が半端なものではない。

「はあ！？」

俺の動きに、モニカの集中力も追い付かず、反応できずにいる。

俺はモニカの後ろに回り、モニカの動きを封じ、首筋に木剣を当てる。

「俺の勝ちだな」

「久也、そこまでやる？」

俺はモニカの返事を聞いて魔術をすべて解除する。
モニカの方も解除したようだ。

こうして、今回の勝負は俺の勝ちに終わった。

第五話『試験勉強 射撃戦闘編』

試験第三科目『射撃技術』

この間は、魔術の試験勉強だったが、中には魔術が使えない人もいる。

そこで登場するのが射撃技術だ。

射撃と言うからにはもちろん銃を使うのだが、軍の使用している銃は普通とは違い、魔装使用となっている。

一般に魔装銃と呼ばれる魔装使用の銃は実弾の他に魔力を撃ち出す。

エドワードさんが言うには、軍は魔力を産み出す半永久機関を持っているらしい。

その半永久機関から産み出された魔力を圧縮し魔装弾として撃ち出すのだ。

ちゃんと銃創に入れて。

だが、魔術師の中にも銃を使う者もいる。

そう言うやつらは、銃創に入れてあった魔装弾が無くなると、自分の魔力を圧縮して装填する。

なぜなら、魔装銃にも利点があるからだ。

魔術で繰り出す攻撃は呪文を唱えなければならない。
強い魔術になればなるほど呪文は長くなることが多い。

魔装銃は威力は銃によって変わるが、毎回同じ威力の弾を撃ち出す。

距離の関係も出てくるが、魔装銃は引き金トリガーを引くだけで攻撃が可能だ。

そして、弾速が明らかに魔装銃のほうが速い。

「……………」

というわけで、今は射撃訓練をしている。

いつものようにモニカと勝負をしているが、今回は銃器を使うので射撃精度で勝負していた。

自分から数十メートルの距離にある的に狙いを定め、引き金に指をかける。

「……………」

ダンッ！

引き金を引くと銃弾が飛び出し、的を撃ち抜く。

「よしっ」

「はー、凄いわね」

「ほら、次モニカの番」

俺はアサルトライフル（89式5・56mm魔装小銃）を手渡す。

このアサルトライフルは軍の特殊育成機関で支給されるものとおなじ物らしい。

おそらく、エドワードさんの物だろう。

特殊育成機関で支給されている物とは言え、弾を撃ち出す銃なのだ。

扱いには十分に気を付けなければならない。

また、個人的に別の銃を使いたいと言う場合には、軍の許可とそれなりの金が必要になるとか。

ま、俺にはまだ関係無い話だ。

「うーん、遠いわね」

アサルトライフル（89式5・56mm魔装小銃）の射程は、約500メートル。

でも、狙いを定めるのは人の目。

モニカはスコープを覗く。

「・・・・・・・・」

そして、引き金を引く。

ダンッ！

弾は的の少し右に当たる。

「ああん、もう！」

「っしやあ。俺の勝ち」

ガッツポーズをする。

今回初めて、モニカが狙いを外した。
つまり、俺の勝ちだ。

「うう。じゃあ、スナイパーライフルで勝負よ！」

そう言つとモニカはバレットM82A1を持ってくる。

「よし。まずは的を遠ざけてつと」

確か、バレットM82A1の有効射程距離は約2000メートル
はあつたはずだが、モニカはどこまで持っていくつもりだろう。

そう思っている今も、モニカは的を遠ざけるために、的をもって
走っている。

もちろん、コンパリス・コルパス身体強化を使っているようだが。

しばらくして、モニカが戻って来る。

「はぁ、はぁ、疲れたぁ」

「お疲れ様」

と言うよりの的をもって走っていくより、別の物を的にすれば良かったのではないかと思うのだが、言えばうるさくなるだろうからよしておく。

「まずは、私からね」

息を整えて銃を構える。

「・・・・・・・・」

そーっと、引き金を引く。

バーンッ！！

大きな発射音と共に、マズルブレイキから噴出する発砲煙と、それに巻き上げられた砂埃が拡散する。

「「ゲホッ、ゲホッ！」」

二人して咳き込む。

「ほ、ほら。次、久也の番」

え、まじでやるのか？

今の砂埃をもう一回吸うのは嫌だぞ。

「どうしたの？ 逃げるの？」

む、逃げると言っただか？

「おし。やってやる」

そうして、俺はスナイパーライフルを構える。

うーん。まだ口の中がじゃりじゃりする。

「一気にけりを着けてやる」

そう言っただ、俺は的から離れる。

「無理よ、そこからなんて。いったいどれだけの距離が」

口のなかじゃりじゃりしながらも、引き金を引く。

バーンッ！！

巻き上げられた砂埃が晴れて的を見る。

弾は的のど真ん中を貫いていた。

「・・・・・・・・」

モニカは目の前で起きた事が信じられない、と言った顔をしてい

る。

「モニカが撃った距離が約1000メートル。」

それに比べ、俺が撃った距離が約2000メートルなのだ。
しかも真ん中に命中。

そりゃ、驚く。

「口、濯いで来る。モニカは？」

「えっ？ ああ、行く」

俺達は水道へ、向かった。

「久也って、あんなに上手かったっけ？」

「ま、才能って奴かな」

俺はモニカの二倍の距離で当てたんだ。
勝ち誇っていいだろう。

「・・・・・・・・」

「その視線止めてくんない？」

「いや、久也ってこんな奴だったっけ？ と思って」

「ごめん。自重する」

「グルルルルル……」

近くで何発もの銃声が聞こえる。

それは人がいるということだ。

その魔獣は飢えていた。

とにかく何か食いたい。

食わなければ死んでしまう。

魔獣はゆつくりと銃声が聞こえる方へ歩いていった。

第五話『試験勉強 射撃戦闘編』（後書き）

自分の学校では、テストまであと一週間に入りました。

次の投稿は時間がかかりますが、今月中にはしたいと思います。

第六話『狼（フェンリル）』

「さて、私も久也と同じ所から当てますか」

「お、やる気だな？　そう簡単には当たらないぞ」

「何よ、嫌味？　自分は簡単に当てたくせに」

そうして、休憩をしていた俺達は再び射撃訓練をしていた場所に
戻る。

「グルオオオオオオ！」

射撃訓練に戻ろうとすると、獣の叫び声が聞こえた。

「何っ！」

叫び声が聞こえた方向を見ると、黒い狼がこっちに走って来てい
た。

「ガルルルルッ！」

飛び掛かって来たのをすんでのところで躲す。

「狼？」

飛び掛かって来たのは、狼のような形状をしていた。

だが、普通の狼より一回り大きい。

毛色は夜のように真っ黒で、朝なのに黄色い眼が光っているようだ。

「もしかして『フェンリル』？」

モニカが狼を見て言う。

「フェンリルって、昔、ここらの沼に住んでいた狼？」

「うん。今じゃ、魔人族が召喚した幻獣でしか見れないはず」

なら、この狼がフェンリルだとするなら、近くに魔人がいるということがあるか？

「ガアアアア！！」

「全く、駄の悪いワンちゃんだな！」

俺は89式5.56mm魔装小銃を拾い、フェンリルをすれ違ひ様に撃つ。

ダンッ！

俺が撃った弾はフェンリルの脇を通り抜ける。

「……………っ！ 速いな。ならっ」

今度はアサルトライフルを乱射する。

ダダダダダダッ！

「ギャンッ！」

その内、一発がフェンリルの足を貫く。

「ガアアア！！！」

フェンリルは狂ったように飛び掛ってくる。

足を撃たれて怒ったようだ。

「久也、下がって！」

モニカが叫ぶ。

俺が伏せるとモニカがバレットM82A1でフェンリルを狙う。

だが、フェンリルはそんなモニカに目掛けて突っ込んでいく。

「・・・・・・・・っ！」

「モニカ！」

俺は、手に白い剣を握ると走り出す。

「シ・アクセレラチオ
加速せよっ！」

加速の魔術を使い、フェンリルに斬りかかる。

「でりゃああああ!!」

横に一闪、フェンリルの胴体を真つ二つに切り裂く。

返り血が周りを赤く染める。

「大丈夫か？」

「え？ ああ、うん」

俺もモニカもフェンリルの返り血で赤くなっている。

「なんだ！ 何があった!？」

「何っ!？」

すると、グレイス夫妻が走ってくる。

二人は辺りに飛び散った血を見て目を丸くする。

「こ、これは!？」

エドワードさんは真つ二つになったフェンリルを見て、また目を丸くする。

「まず、二人共着替えて来なさい。話はそれからだ」

俺は着替えてリビングに来る。

そして、しばらくしてモニカも来る。

「さて、二人共。何があつたんだ？」

モニカが椅子に座ると、エドワードさんがはなしはじめる。

「はい。実は……………」

俺はフェンリルの事を話した。

俺の話を聞くと、エドワードさんは難しい顔をする。

「どういうことだ？」

「さあ、俺には何とも」

「…………この事は軍の方に報告しておく。二人はもう寝なさい」

俺ら二人は「はい」と返事をして、部屋を出た。

「ねえ、久也」

「……………ん？」

部屋の前、モニカが話し掛けてくる。

その表情はなんだか暗い。

「なんで、フェンリルが出てきたのかな」

「さあな」

「もしかしてさ、魔人族が久也の事を狙ってるかも、って思って」

どういう思考でそこに行き着いたのだろうか。

可能性は捨てきれないが、ただ天使の加護を受けているだけの、しかも俺の様なまだ14歳の子供の事を狙うだろうか。

「んな訳ねえって」

「そうかな」

「まあ、1つ言える事があるとしたら……」

俺は自分の部屋のドアを開ける。

「また、ああゆう奴が来るかもしれないって事だな」

「えっ？」

俺はそう言っただけで自分の部屋に入り、ベッドに横になる。

そして、すぐに眠りに落ちた。

シ・アクセラレチオを使って、体に疲れが溜まっていたのだ。

『ちょっと、久也？』

ドア越しにモニカが言っても俺には聞こえなかった。

第七話『所属決定』

「ふぁ・・・・・・・・」

フェンリルを倒した翌日、エドワードさんが話があると言つ事で俺達はリビングに集合していた。

「昨日のフェンリルについてだが、上の方に報告したところ・・・」

モニカは朝が弱いらしく、目が半開きだ。

「二人には、すぐに軍の特殊育成機関に所属してもらつ事になった」

「はっ!?!」

これにはモニカも驚いたようで、目が半開きから全開になった。それはそうと話の方だが、今何と言つた？

「お父さん、どういう事!?!」

「そうです。エドワードさん、説明してください」

俺達が詰め寄ると、エドワードさんは「まあ聞け」となだめる。

「この街の近くには沼があるのは二人共知っているね」

「あの、フェンリルが昔いたって言つ?」

「そうだ」

すると、エドワードさんの顔が陰しくなる。

「今はもうフェンリルはいない、だが、昨日のフェンリルは間違いなくフェンリルだ。では、いなくなったフェンリルが出現したのは何故か」

「魔人族の召喚獣って可能性は？」

モニカが割り込む。

だが、エドワードさんは

「それはないな。召喚獣なら、殺したらすぐに消えて無くなってしまっ
まう」

でも、昨日のフェンリルは殺しても消えないでそのままだった。
ちなみに死体はエドワードさんが軍の方に報告する時に持ってい
ったらしい。

「なら、魔人族が放したってことですか？」

「まあ、ここらへんにフェンリルが来るにはそれしかないと思う。
沼にはもうフェンリルはいないからな。で、その事を報告したら、
街の守りを強化してもらう事になったから、心配ない」

サニーさんが何か心配そうにしている。

フェンリルのようなものがまた来るかも知れないとなると、心配
になる。

「二人が軍で強くなってくれば、魔人族に対抗する戦力になるんだ。魔人族を全滅させることができれば、この戦争もおわる」

本当なら残ってこの家を守っていたいが、

『じゃあ、さやちゃんが大きくなったら、強くなって私を助けてね』

「・・・・・・・・」

そつだ。俺は強くならなければならぬんだ。

軍の特殊育成機関に入って戦闘技術を身に付ける事で強くなる事ができるはず。

「分かりました」

「久也？」

「ありがとう、モニカは？」

「・・・・・・・・分かった」

モニカはサニーさんを見て心配そうにする。

街の中が絶対安全じゃないとなれば、家族が心配なのだろう。

「二人共、ありがとう。急で悪いが、明後日から機関の方に行ってもらつ。荷物をまとめておいてくれ」

「「はい」」

「・・・・・・・・ふう」

数分で荷物をまとめる。

まあ、荷物が少ないだけなのだが。

「久也、終わった？」

「お前も結構早いな」

女の子って準備に時間がかかるもんじゃないだろうか。

「どうした？」

「久也はさ、心配じゃないの？ この家の事」

そりゃ心配に決まってる。

でも、

「約束が・・・・・・・・あるからさ」

「約束？ 誰との？」

そう言えば話して無いんだよな研究所の事以外。

「……………いや」

「え、教えてくれないの？」

あんまり、言いたくはないな。少し恥ずかしい気がするし。

「教えてよー」

「誰にも言っなよ？」

「分かってるって」

話しても大丈夫だろう。

「俺に能力を植え付けた研究所の事は話したよな」

「うん」

「ほのかちゃんっていつてな、研究所に行く前にいた孤児院で、よく一緒に遊んでいた女の子なんだ」

モニカは「女の子？」と少し眉を寄せる。

「俺って小さい頃泣き虫でな、その子によく慰めてもらってた。だからほのかちゃんと約束したんだ。強くなってほのかちゃんを守るって」

「ねえ」

モニカが話に割り込む。

「ほのかちゃんって、今は何してるの？ 孤児院にまだいるの？」

「死んだ……多分」

そう言った瞬間、モニカの表情が固まる。

「研究の負荷に耐えられなくなって……死んだ」

「……久也はどこまで強くなるつもりなの？」

どこまで？

「どこまでって……まあ、最強、かな？」

しかし、どこまで強くなったら最強になれるのだろうか。
軍の特殊育成機関に入って、何か分かるだろうか。

「最強……ねえ」

モニカもあまりピンとこないようだ。

まあ、まずは機関の方に行って、他の人達の事を見れば基準は分かるだろう。

「でも、最強になって何をするの？」

「えっ？」

その後の事を考えた事がない俺はすぐに答えられなかった。
最強になってから……。

「・・・・・・・・」

「久也？」

強くなつてほのかちゃんを守る。
そう約束したはず。

でも、今となつては、ほのかちゃんは生きていない。
俺は強くなつて何をするのか？
守る人はもういないというのに。

「・・・・・・・・どうするのか、分かんなくなってきた」

いつそモニカに課題でも出してもらうか？

「は？」

最強になったとき何も目標が無いなら探せばいい。

「もし俺が最強になった時、何か相談があつたら言えよ。乗ってやるから」

「・・・・・・・・え」

ほのかちゃんはもういないけど、約束は果たすつもりだ。

ただ今は、最強を目指すだけだ。

第七話『所属決定』（後書き）

やっとテストが終わったーーーーー!!

と言うことで投稿しました、第七話！

テストが今日終わったばかりなんですけどね。

いつもどおり更新が遅いですが、読んでくれると嬉しいです。

第八話『特殊育成機関 AIGIS』

「
」

軍の特殊育成機関『AIGIS』

俺達はエドワードさんの言う通りにAIGISに所属する事になった。

だがその際、俺は名前を偽り、楠木久也ではなくエクシア・グレイスと名乗る事となった。

これは、俺がいた研究施設が軍上層部のトップシークレットだった場合を想定して、本当の俺を隠すためらしい。

もちろん、能天使の加護を受けているのも秘密にしなくてはならない。

でも、エクシアってどうよ。

能天使そのままじゃねーか。

「
えつと？」

魔法族は正規の軍人達とその見習いに分け、正規の軍人が所属する所を『EXCALIBUR』と言い、見習いの方は『AIGIS』と言っらしい。

つまり、俺達は見習いなのだ。

「
でかいな」

AIGISの建物は予想を越えて大きかった。
いったいどれくらいの広さがあるのだろうか。

高い所が見えないわけではなく、左右に広がる防壁が何処までものびている。

「まず、入ってみましょ」

「あ、ああ」

俺達は防壁の大きな扉の前にいる検問の人へ歩いていく。
歩けば歩くほど、防壁は広く見えてくる。

「すいませーん」

「ん？」

モニカが呼ぶと軍人らしい人はこっちに振り向く。

「今日から所属する事になったモニカ・グレイスと」

「く　　エクシア・グレイスです」

危うく、楠木久也と言いそうになってしまった。
今の俺はエクシア・グレイス、エクシア・グレイスなんだ。
気を付けなくては。

「名前を言えば分かるって言われたんですが？」

「君達がグレイス教官の息子と娘だね？　聞してるよ」

そう言って扉を開けてくれる。

俺達はその人に軽く礼をして建物の中に入った。

建物の中に入った俺達は、中で待っていたエドワードさんに連れられて通路を歩いていた。

「そうだ、AIGISについて簡単に説明しておこう。AIGISはお前達のような志願兵を一人前の兵士にするための教育機関だ。なあと、アカデミーとでも思ってくれて構わないさ。後、ここでは久也君は私の息子のエクシア　え？　こないだ聞いた？　まあいいか。そうだ、AIGISにはエンジェルズというエリート集団があつて、エクシアのような天使の加護を受けた者だけが入れる　まあ、学校で言う生徒会のような所だよ。それに

」

などと長い説明を聞きながら俺達が入るクラスの教室の前に来た。

「じゃあ、呼ばれるまで待っててくれ」

「はい、解かりました」

エドワードさんは俺達を置いて先に教室に入っていた。

「　学校みたいな所、か　」

「ん？　どうしたの、久也」

「エクシアだ」

「あ、ごめん」

「あまりピンと来ないんだよ、学校みたいな所って言われても」

俺がそう言ってもモニカはよくわからないようだ。

「学校みたいって言っても教えるのは戦闘技術や魔法の使い方だろ？」

「教科が戦闘技術になっただけじゃないの？」

「そうなんだけど、学校で教えるのは生きるための知恵。AIGISで教えているのは相手を殺すための知恵。戦争をしちやいけないなんて主人公じみた事は言わないよ。俺自身、戦う為にいるみたいなもんだし」

「すごいね、久也って」

モニカの言葉に驚く。

「普通、そうは思わないよ。ほとんどの人が戦争は悪いことって思うはずだもん」

「モニカは思うのか？」

モニカは「うん」と首を縦に振る。

そう思えるのも、俺はすごいと思う。

戦争は悪い事。

しかし、そう思えるのは少ないと俺は思っただが。
誰だって好き好んで戦う事はない。

戦闘狂ならともかく。

人は、いや、知恵を持つ生き物はよく相手の事を考えれば、共存は可能だろう。

しかし、知恵を持つために些細なことで誤解し、解り合えなくなる。

だから戦争が起こるんだ。

俺はそう思う。

「おい、入って来いと言ってるだろう」

いつの間にか呼ばれていたようで、エドワードさんが教室から出てくる。

「あ、すいません」

「ごめんなさい」

教室に入ると他の人達の視線が俺達に集まった。アカデミーと言っただけあって生徒はみんな若い。

「えっと、モニカ・グレイスです。よろしくお願いします」

「エクシア・グレイスです。よろしくお願いします」

クラスの皆がヒソヒソと話始める。
その中でも聞こえたものは

「あの教官の子供か」

「エクシアって子、変わった名前ね」

「エクシア 能天使？」

エドワードさん！　すでに名前が怪しまれまーす！

「静かにしろっ。コイツらは私の子供だが特別扱いするつもりはない。仲良くしてやってくれ」

俺達は指定された席に座り、ホームルームを終える。

すると、ホームルームが終わると同時に生徒達が集まってきた。

『グレイス教官の子供が私達のクラスに来るなんて驚き！』

『ねえ、モニカちゃんだっけ？　好きな食べ物って何？』

『エクシアって名前、変わってるよね。天使の加護でも受けてるのか？　え？　そんなことは絶対に無い？』

そんな事を休み時間聞かれた。

そして、一時限目の授業の魔法の基礎知識を学んだ。

「はー」

「どうしたのよ。ため息なんてついて」

「エドワードさんってそんなに凄い人なのか？」

なぜ、エドワードさんの子供が来たただけであんなに興奮するの
だろうか。

「お父さん？ お父さんは軍の中でも結構優秀な人材らしいわよ？
たしか、大佐 だったかしら」

大佐だと！？

「なるほどな」

俺は驚きを通り越して落ち着いてしまう。
しかし、それで納得した。

大佐の子供が来たなら、そりゃ興奮するか。

「エクシア君」

「ん？」

クラスの女の子に呼ばれる。

「何？」

「なんか、先輩がエクシア君を探してる」

先輩？ 誰だろう。

女の子がドアの方を指差していたので、見てみると

「誰だ、あれ？」

ロングヘアーで腕を組んで仁王立ちしている。
なんと言つか、おおきく見える。

「行つてきなよ、エクシア」

「おう」

俺はその人の所へ歩いていった。
近くに來た所で目が合う。

「お前がエクシア・グレイスか？」

「はい、そうですけど？」

「来い。話がある」

すると先輩は歩き出す。
それについていった。

その頃、ある一室。

7人の少年少女が机を輪にして座っている。

「例の彼は、どう」

「実際に会ってみないと解りませんが、恐らく」

「確かに感じます。天使の力を。でも、少し 怖いです」

「怖い？」

「はい。なんか変な感じがするんです。黒い 闇みたいなものが」

彼らが話しているのは今日、所属することになった少年『エクシア・グレイス』

「 エクシア・グレイスどんな子かしら」

登場人物設定『エンジェルス七人』

登場人物 3

エンジェルス第二位

名前：リリー・バルヒェット

容姿：金髪、ロングヘアー、緑眼、背は175?

武装：炎の剣

アサルトライフル（89式5・56mm魔装小銃）↑軍の特殊育成
機関から支給されるもの。

智天使の加護を受けているのでエンジェルスでは第二位とされる。
炎の剣で敵を焼き斬る事を主な攻撃手段としている。

登場人物 4

エンジェルス第一位

名前：アリス・デノ

容姿：ブロンド髪、セミロング、薄茶色の眼、背は174?

武装：ダガー

アサルトライフル（89式5・56mm魔装小銃）↑軍の特殊育成機関から支給されるもの。

熾天使の加護を受けているのでエンジェルスでは第一位とされる。炎を操り敵を焼き払う魔法を得意とし、エンジェルスの中では最強の実力の持ち主。

登場人物5

エンジェルス第三位

名前：アデル・バックレー

容姿：金髪、碧眼、背は180？

武装：白い拳銃

アサルトライフル（89式5・56mm魔装小銃）二丁↑軍の特殊育成機関から支給されるもの。

座天使の加護を受けているのでエンジェルスでは第三位とされる。最強の弾幕天使としてAIGISで有名。相手を寄せ付けない程の弾幕を持つ。

登場人物 6

エンジェルス第四位

名前：涼原^{すずはら}風花^{ふうか}

容姿：茶髪、ショートカット、黒眼、背は167?

武装：白いジヨウロ

アサルトライフル（89式5・56mm魔装小銃）↑軍の特殊育成
機関から支給されるもの。

主天使の加護を受けているのでエンジェルスでは第四位。
自然、主に植物を操る能力を持つ。
園芸が好きでよく植物を育てている。

登場人物 7

エンジェルス第五位

名前：金剛^{こんごう}力丸^{りきまる}

容姿：黒髪、黒眼、背は178?

武装：白いガンドレット

アサルトライフル（89式5・56mm魔装小銃）↑軍の特殊育成
機関から支給されるもの。

力天使の加護を受けているのでエンジェルズでは第五位とされる。
名前のままの金剛力で敵を殴り倒す。

登場人物 8

エンジェルズ第七位

名前：ジャック・ダリユー

容姿：ブロンドの髪、薄茶色の眼、背は178?

武装：白い楯

アサルトライフル（89式5・56mm魔装小銃）↑軍の特殊育成
機関から支給されるもの。

権天使の加護を受けているのでエンジェルズでは第七位とされる。
守護系魔法を得意とし、最強の魔法の楯を『イージス』と呼んで
いる。

登場人物 9

エンジェルス第八位

名前：エリザベス・ホワイト

容姿：金髪、ポニーテール、ブルーの眼、背は約172?

武装：白い槍

アサルトライフル（89式5・56mm魔装小銃）↑軍の特殊育成
機関から支給されるもの。

大天使の加護を受けているのでエンジェルスでは第八位とされる。
白い槍で敵を風ぎ払う。

登場人物 10

エンジェルス第九位

名前：エミリー・ホワイト

容姿：金髪、ツインテール、ブルーの眼、背は171?

武装：白い杖

アサルトライフル（89式5・56mm魔装小銃）↑軍の特殊育成
機関から支給されるもの。

神使の加護を受けているのでエンジェルスでは第九位とされる。
全属性の魔法を使いどんな敵にも対応できる。

登場人物設定『エンジェルス七人』（後書き）

エンジェルズの七人で人が増えてしまいました。

分からなくなったら登場人物設定を読んでいただければ分かります。

遅くなつてすみませんでした。

第九話『エンジェルズ』

特殊育成機関『AIGIS』は対魔族のために、兵を育成するための機関だ。

AIGISは三年制で、三年間の育成により合格した者が、正規の軍隊『EXCALIBUR』に入ることができる。

AIGISの中でもっとも注目されている団体がある。それはエンジェルズと呼ばれる団体だ。

「着いたぞ」

「ここは？」

俺は先輩についていつて一つの部屋の前に来た。他の教室とは雰囲気が違う。

「アリス様、彼を連れて来ました」

『どうぞ』

中から声が聞こえる。

すると先輩はドアを開けて中に入る。

「お前も来い」

「は、はい」

先輩についてその部屋に入ると、中には七人の生徒が机を輪にして座っていた。

その中でも部屋の一番奥の生徒が話し出す。

「ようこそ、エクシア君」

「は？」

「私はアリス・デノ。熾天使の加護を受け持つ者よ」

「へ？ あ、エクシア・グレイスです。 どうも」

今、この人 （アリス・デノだっけ？） 熾天使の加護を受け持つ者とか言ったか？

制服のネクタイから三年だ。

「で、こっちからアデル・バックレー、座天使の加護を受け持つ者」

「よろしく、エクシア君」

アリスさんが左の人を紹介すると、その人――（この人も三年）は軽く会釈してきたので、俺も返す。

「涼原風花、主天使の加護を受け持つ者」

「あ、えっと。よ、よろしく願いします」

風花さん。ネクタイから二年だ。

背は160代で、なぜかおろおろとしているようだ。

「金剛力丸だ。力天使の加護を受け持つ者だ」

金剛力丸。ネクタイから二年。
背は180ぐらい。

「ジャック・ダリユー。権天使の加護を受け持つ者」

ジャック、ネクタイから俺と同じ一年。
背は178ぐらいだろうか。

「エリザベス・ホワイト。大天使の加護を受け持つ者。で、こっちが妹のエミリー・ホワイト。神使の加護を受け持つ者」

エリザベスとエミリー。二人とも俺と同じ一年で、
双子か？ 雰囲気は違うけど、顔がそっくりだ。
エミリーって子の方、なんか怯えてる？

「で、君をつれてきたのがリリー・バルヒェット。智天使の加護を受け持つ者」

なるほど、ここがエンジェルズか。
天使の加護を受け持つ者の集まり。
あれ、なんで俺呼ばれたんだ？

「さて、エクシア君。君が呼ばれた理由は分かってるね？」

「い、いや、ぜんぜんわかりません」

「そうかしら？」

ここに来るのは天使の加護を受け持つ者のみ。
まさか、俺が能天使の加護を受け持つ者だと知っているのか！？

「風花ちゃん、確かなのよね？」

「はい、確かにエクシア君から天使の力を感じます」

もしかして、バレてる？

八人全員の視線が俺に突き刺さる。

「本当のことをいったらどうかな？」

アリスさんは目を細める。

「でも、どうしてもしらを切るつもりなら
お願いできる？」

エリザベスちゃん、

「了解しました」

エリザベスがそう言うつと後ろのリリーさんは俺の腕を掴み、そのまま引きずっていく。

俺は何がなんだか分からないまま、引きずられていった。

引きずられていってしばらくすると、ようやく止まる。

「今度はどこですか？」

俺は乱れた服を直しながら聞いた。

「ただの訓練場だ」

「ここで、エリザベスちゃんと戦ってもらいます！」

声がしたので探すと、傍観席からアリスさんが手を振っているのが見えた。

「ほら、さっさと行け」

「うわっと」

背中を押されて前に出ると、広く開けたところに来た。

「え？」

何かなんだかさっぱりわかんない。

すると、俺のいる所の反対側からエリザベスが出てきた。

「エンジェルス第八位、エリザベス。エクシア・グレイスに模擬戦を申し込む！」

ドーンッとしてきた入り口が閉じてしまう。

「え、ちょっと待つ」

『それでは、エリザベス・ホワイト対エクシア・グレイス。模擬戦を開始してください』

スピーカーからの声を合図に、エリザベスが走り出した。

しかも、その手には俺の白い剣と同じような白い槍を構えていた。

「はあああああ！」

槍の矛先が迫る。

「セ・ディフェンデレ
我が身を守れ！」

俺は自分の前に壁を作り、エリザベスの槍を防ぐ。

「どうした、エクシア。能天使の力を見せてみる！」

エリザベスは壁を回って槍を突きだしてくる。

俺はそれを躲し、走り出した。

「逃げるな！」

「そんな物当たったら死ぬだろ！？」

「貴様っ、そんな物とはなんだ！」

まずい、エリザベスの奴本当に怒ってやがる。

さっきの突きも躲さなかったら絶対に死んでた。

俺何かしたか？

「絶対に逃がさんっ！」

うわー！ 追ってきたー！！

俺は全力ダッシュで逃げる。

「逃がさないと云ったろっ！」

背後から槍が突かれる。

俺は方向を転換して躲し

「悪いっ！」

「へ？」

思いつきり脇腹に蹴り入れる。

「ゲホッ、ゲホッ」

「大丈夫か？」

脇腹を押さえるエリザベスに近づこうとする。

「寄るなっ！」

エリザベスが槍を振り回す。

「なんだよっ！ 心配したのに」

するとエリザベスは槍を地面につけて立ち上がる。

「この程度、心配される言われもない」

エリザベスは再び槍を構え直し、対峙する。
折角心配してやったのに。

「さあ、戦え！」

戦えって言われてもな。

この人達はきつと俺の力を知っている。

この戦いは俺の力を確認するための物だろう。

どっちにしろ、白い剣と黒い鎌を出すわけにはいかないな。

「
フラマ・グラディ
焰の剣」

呪文を唱え、手に刃に炎を宿した剣を出す。

「なんだ、それは？」

「フラマ・グラディって剣だ」

エリザベスが不機嫌そうにしている。

「なぜ、天使の力を使わない？」

しつこいやつぢゃな。いい加減諦めてほしいのだが。

「俺にはそんな力はない」

そう言っても信じないんだろうな、こういう人達は。

エリザベスが持っている白い槍は、恐らく俺の白い剣と同じ、天使の力だろう。

あの人、大天使の加護を受け持つ者って言ってたしな。

「私の妹の力は確かだ。貴様が加護を受け持っているのは分かっている。いい加減認めろ」

何かなんでも天使の加護の力を使わせたいんだな。

「なんでそんなに天使の加護を受け持っていることにしたいんだ！？」

「私たちは天使の加護を受け持つ者。熾、智、座、主、力、能、権、大天使、神使、九つの加護を受け持つ者。その中で最も戦闘力のあるとされている能天使の加護を受け持つ者。それが貴様だ！」

能天使は神より堕天使をやっつける役を負わされている階級だ。しかし、最も魔に接触する回数が多い能天使は九位の天使達の中で最も堕天使になりやすい位なのだ。

その加護を受け持つ者もそうなのかも知れない。なら、安易に力は支えない。

『おいっ、お前ら何してる！』

放送から怒鳴り声が聞こえる。いつの間にか傍観席から七人が消えていた。

「全く、お前達と言う奴は」

放送で怒鳴り声を出したのはエドワードさんだった。

「で？ お前達はなんで戦ってたんだ？」

「私の妹がエクシア・グレイスから天使の力を感じると言うので、エンジェルズに入ってもらおうと」

「そうです」

すると、エドワードさんは、はあ、と溜め息を吐いた。

「どうなんですか、教官？」

「」

エドワードさんは押し黙る。

天使の加護を受け持つ者として認めるか、ただの間違いと言うか。教官のエドワードさんが言うてくれれば、エンジェルズの人達も諦めてくれるだろう。

「しょうがない。そうだよ、エクシアは能天使の加護を受け持っている。だけど上層部には言わないでくれ。事情があるんだ」

「エドワードさん！？」

「エンジェルズの第九位のエミリー・ホワイトの力は本物だ。隠し通せないと分かっていたけど」

なら、先に言うておいてくれればよかったのに。
こんな模擬戦するハメになるとは。

「では、天使の加護を受け持っていると認めるんですか？」

「ああ、認めよう。でも」

「分かっています。上層部には黙っています」

はぁ、と溜め息を吐く。

で、さっきから扉の方から視線を感じるのですが？

「入ってきたらどうですか、皆さん」

すると、扉を開けて七人が入って来て、アリスさんが前にでる。

「バレてたか　さすが、能天使の加護を受け持つ者だね。じゃあ、これからよろしくね。エクシア君？」

「はいはい、よろしくお願いします」

能天使の加護を受け持っている事は認めたけど、本名は明かさなかった。

まだ、エクシア・グレイスとして暮らしていく事になりそうだ。

第九話『エンジェルス』（後書き）

アクセス数が1000件を越えましたー！

これからも頑張って書いていきたいと思っています。
読んでくれてありがとうございます。

サイドストーリー『記憶に残る思い』（前書き）

2011年、クリスマスイブということで投稿しました。
クリスマス企画です。

サイドストーリー『記憶に残る思い』

AIGISに所属し、初日からエンジェルズ寮に入ることになった俺は、部屋で荷ほどきをしていた。

すると、荷物の中に研究所で着ていた服を見つける。

「なんで、持ってきたんだろう」

確か、研究所を破壊した後、グレイス夫妻に服を貸してもらった後、捨ててしまおうと思った。

でも、捨てられなかった。

研究所の物とはいえ、これを見るとほのかちゃんを思い出せたからだ。

「」

すると、服のポケットに入っている物があった。

「花飾り？」

最初、ミサンガかと思ったが、それは花の茎でできているそれは花飾りだ。

「これ、ほのかちゃんが作ってくれたんだよな」

その日はクリスマスイブで、研究所なのに内装はクリスマス使用になっていた。

外は雪が積もっていて、ホワイトクリスマスになっていた。

「ふうー、寒っ」

研究所のみんなで外に出て遊んでいた。

雪合戦をやる子もいれば、雪だるまを作る子もいた。

「さやちゃん？ 何してるの？」

「ほのかちゃん。 ちょっと寒くて」

俺は雪がかからないように研究所の入り口の所にいた。

「せっかく雪が降ってるんだから、楽しまないと。 ほら」

そう言っただ俺の手を引いて、外に引きずり出すほのかちゃん。

俺は自棄になって遊びまわった。

そして、夜になると皆は疲れて寝てしまった。

だが、俺はサンタクロースが来ると聞いて寝れなく、一人窓から月を見ていた。

「サンタクロース か」

「さやちゃん？」

ほのかちゃんが起きてきてしまった。

「ごめん起こしちゃった？」

「ううん、サンタさんが来るって聞いて眠れなかったの」

「うん、俺も」

ほのかちゃんは俺の隣に座る。
息を吐くと白くなった。

「へっくち」

「ん？」

ほのかちゃんがくしゃみをする。

ほのかちゃんは上着を着ているが、毛布を持ってきていなかった。
俺はほのかちゃんに近づき、毛布を被せてやる。

「さやちゃん？」

毛布をかけられてほのかちゃんが驚く。

「寒くないの？」

「さ、寒い　　くないぞ」

「めっちゃめっちゃ寒そうだよ」

すると、ほのかちゃんは毛布の半分をかけてくれて、一つの毛布の中に二人入っていると言う構造になっている。

体が密着しているので、ほのかちゃんの体温が直に感じられる。

「暖かいね」

「う、うん」

雰囲気のせいだろうか、何故か緊張する。

寒いのに顔が熱くなり、ほのかちゃんが笑うのを見ると更に熱くなった。

「サントさんって、どんな人かな」

「さ、さあ」

「先生は赤い服を着て、空飛ぶソリに乗ってるって言ってたけど」

「う、うん」

すると、ほのかちゃんが唐突に「そうだ」と言う。
はい、と渡して来るそれは花飾りだった。
ハボタンの花がしっかりと結んである。

「作ってみたの」

「ありがとう」

それにしても寒い。

「あっ！」

ほのかちゃんが声を出し、ビックリした。

空を見ているので俺も見てみると、流れ星が見えた。

「ねえ、あれってサンタさんかな？」

「いや、あれは流れ」

「だとしたら、早く寝ないと。夜更かししてたら良い子じゃないよね？　おやすみ、さやちゃん」

ほのかちゃんはそのまま寝てしまう。

「ちよつ、ここで寝るの？」

ほのかちゃんはすでに寝息をたてていて、起こすのは悪いと思い、動けなかった。

「おやすみ、ほのかちゃん」

布団は二人の体温で暖かくなっていて、目を瞑るとすぐに眠ってしまった。

「ほのかちゃん」

いまでは、彼女の名前を口にすると強くなるという約束が浮かび上がる。

ほのかちゃんは優しく、俺よりも強くて　笑うと可愛い。

花飾りの花はもう枯れてしまっ
て残っていないが、思い出は記憶
に残っている。

ほのかちゃんがくれたハボタンの花。

ハボタンの花言葉『記憶に残る思い』。

その思いを確かめるように花飾りと服をしっかりと握りしめた。

第十話『出撃』（前書き）

時間かかった上に短くてすいません。
学生の身として、宿題はやらなくてはいけないんです。

第十話『出撃』

エンジェルズに入って一週間がたった。エンジェルズに入る事をクラスで打ち明けると、それは驚かれた。

しかし、モニカだけは何故か暗い表情をしていた。聞いてみても『そんな顔してた？』と言って、教えてくれなかった。

「失礼しまーす」

俺のはいるクラスは変わりエンジェルズのクラスに入る事になった。入ると生徒は俺を除いてたったの八人。俺と同じ天使の加護を受け持つ者達。

元のクラスは30人位いたのに。

「おはよう、エクシア君」

俺は未だにエクシア・グレイスとしてAIGISに所属している。

AIGISは寮暮らしなのだが、エンジェルズ専用寮などという物があつてビックリした。

どれだけ優遇されてるんだよエンジェルズ。

「教官はまだ来てないんですね」

エンジェルズの教官、アイナス・カルティエ教官。

エドワードさんとは戦友らしく、とても厳しい人だ。

自分の席に座るとエミリーの視線がきになる。初めに会った時も恐がっているようだったが。

「何かな？」

「ひつ。いえ、なんでも」

やはり恐がつている。

うーん、何故だ。

「駄目よ、エクシア君。エミリーちゃん恐がらしちゃ」

アリスさんが話かけてくる。

「なんで、恐がられるのかわからないんですが？」

「初め、エクシア君に暗い闇の様なものを感じるって言うてたけど。何か心当たりは？」

心当たり、心当たりか。

闇の様なもの？

確かに俺の黒い鎌は真っ黒だが

「いえ、ありません」

「そう？」

鎌がただ黒いってだけで、悪い物とは言いきれない。

黒くたっていいじゃないか。

それにしても教官は遅いな。

一週間だが、教室に入ると『遅いぞ、エクシアっ！』と怒鳴っているのに。

まだ不慣れな所で、戸惑っていただけなのにな。

「ふわぁ」

「寝不足かい？」

座天使の加護を受け持つ者、アデル先輩が欠伸をした俺 に近づいてきた。

アデル先輩は、言っちゃなんだが、ふわ ふわしている人だところの一週間で思った。

「はい、一週間がたつてもまだ慣れないので」

俺は教官が来るまで寝てしまうことにした。

すると、クラスの扉がバーンと開け放たれる。扉の音で飛び起き、見回すと教官が入ってきていた。

「先程、EXCALIBURから入電があった。エンジェルズのを借りたいとの事だ。これより、ミーティングを始めるぞ！」

EXCALIBURからの入電ってなんだ？

エンジェルズの力を借りたい。て、もしかして！？

「現在、エリア59-Cで強力な魔人族と交戦状態にあるらしい。我らはエリア59-Dに展開中の部隊と応援に向かう。いいか？いつも言っているがこれは訓練ではない、実戦だ」

まさか、AIGISに来て一週間で実戦に借り出されるとは。エンジェルズに入るところということが、って教官から聞いてはいたが。

いざとなるとこも緊張するものなのか？

「教官」

「なんだ、アリス」

少し焦り気味の教官にアリス先輩が問う。

「エクシアはまだ実戦に慣れていませんが」

「大丈夫です。行けます」

初めての实戦で後れをとるわけにはいかない。

俺は強くならなくてはならない。

それが約束だから。

「もちろん、そうしてもらわなくてはならない」

そうしてもらわなくてはならない？

いや、そうするんだよ。

絶対にな。

「それでは、A I G I S 精鋭部隊『エンジェルズ』。出撃せよ」！

俺達は教官から指示を受け、エリア59-Cに着いた。

合流した部隊はすぐに配置につき、交戦を開始する。

到着してすぐにアリス先輩からの指示が出される。

「私達の任務は前線に出て、魔人族を殲滅すること。EXCALIBURの部隊はこれ以上の魔人族の進行を防ぐための防衛線ではないから援護は期待しない方がいいわ。それと、エクシア君？」

「は、はい！」

「貴方も前線よ」

その瞬間、アリス先輩と俺以外の全員が驚いた。

「アリス様、でもエクシアは」

教官の命令で俺も戦闘に加わるんだから甘えは許されないな。

「わかってるわ。でも、エクシア君の力は接近戦用だから前に出てもらわないと困るの」

アリス先輩は、分かってるわね？　という目で俺を見る。それに対して俺は頷いて見せた。

「なら、前線に出るのはエクシア君、リリー、力丸、エリザベスの四人でいってちょうだい。残りは後方から支援をして」

『了解っ！』

俺は前線に出て魔人族の部隊が来るのを待っていた。

「怖いか？」

「えっ？」

魔人族がいる方向をじっと見ている俺に、金剛先輩が話かけてくる。

「初めての戦闘の時、俺もそうだった。迫ってくる魔人族を見て体が震えたものだ」

「金剛先輩」

「来るぞっ！」

リリーがいい放つと同時に魔人族が向かって来るのが見えた。魔人族は召喚獣を盾にして進行している。俺達は身構えた。

「全員、構えろ！」

全員共銃を構え、俺は白い剣を、リリーは炎の剣、金剛先輩は白いガンドレット、エリザベスは白い槍を装備する。

「全員、散開！」

リリーの合図に合わせて散らばる。

「うおおおおおー!!」

俺は身体強化を使い、コンパリス・コルプス跳躍せよで、シ・サルトム空中から敵に襲いかかる。

「何だ、コイツは!？」

魔族は驚きを見せている。

「エンジェルズ第六位エクシアっ！ 真打ち登場って ね！」

「エンジェルズ第六位!？ 馬鹿な、エンジェルズは八人しかいないはず」

「新メンバーだよっ！」

襲ってくる召喚獣を撃ち、新メンバーに驚く魔族を斬る。
コンパリス・コルプス身体強化で体が強化されているので、難なく敵の数を減らしていた。

「!のっ!」

倒せども倒せども、召喚獣ばかりでろちが明かない。

「エクシアっ！」

エリザベスが叫んだと同時に、光線が迫る。

反射でそれを躲したが、銃に掠ってしまい、使い物にならなくな
ってしまった。

「なんだ？」

光線が飛んできた方を見ると、そこには大きな銃と大剣を担いで
いる魔人族がいた。

「やっと、見つけたぜ。面白い奴」

第十一話『破壊の名を持つ敵』（前書き）

皆様明新年けましておめでとございます！
今年はじめの投稿です！

第十一話『破壊の名を持つ敵』

「なんだ？」

「やっと、見つけた。面白い奴」

光線を撃ってきたと思われる魔族は大きな銃と、大剣を担いでいる。

また、その武装の大きさに似合った体格をしている。

「黒い、大剣？」

その魔族が担いでいる大剣は俺の黒い鎌と同じような色、いや、同じ黒色をしている。

「どうおりゃあああ！」

魔族は大剣をまるで玩具のように振り回す。

「ちいっ！」

白い剣で受けるが、大剣の斬撃を受ける時の衝撃で吹き飛ばされる。

「なんて、馬鹿力だよ」

「我が名は破壊^{デストラクシオン}。力を持ち能天使よ、私と全力で戦え！」

こいつ、何で俺が能天使の加護を受けていることを知ってるんだ？

自らの名前をデストラクションと名乗った魔族は大剣を振りかぶる。

俺はそれを避けるが、俺のいたところの地面には黒い大剣が刺さっている状態になっていた。

こんなもの生身で受けたら、絶対死ぬ！

「どうした能天使！ 逃げないで戦え！」

「このっ！！」

剣で斬ろうとするも、大剣で防がれる。

「はははは、そうではなくてはな！」

デストラクションは盛大に笑いながらも大剣を振り回す。

俺はそれを躲しながら、剣を突き入れる。

「私の攻撃がこれだけだと思っな！」

いちいち大きな声でそう言うと、デストラクションは地面を殴りつけた。

なんだ？ と警戒していると、足元の地面が盛り上がり、凄まじい衝撃波が体を襲った。

「なっ！？」

衝撃波を受け、遠くに吹き飛ばされる。

「どうだ、我の力は！」

気付くとデストラクションは目の前にいて、大剣を振りかぶっていた。

セ・ディフェンデレ
「我が身を守れ！」

障壁が大剣を受けるが、衝撃が体に伝わってくる。
先程の力を使っているのだろう。

デストラクションは何度も何度も大剣を障壁に叩きつける。

「どうしたどうした！？ 守ってばかりではどうにもならんぞ！！」

デストラクションの連撃の隙を突き、その場から逃げる。

デストラクションはすぐに斬りかかってくる。

デストラクションの斬撃を白い剣で受け、隙を突いては斬りかかるが、黒い大剣で防がれる。

「どうおりやあああ！」

「なあっ！？」

大剣を受けた瞬間、剣が弾かれてしまう。

剣は遠くに投げ出され、地面に刺さる。

「能天使、本気で来い！」

デストラクションが迫る。

武器を無くしては戦えない。

いや、まだあるじゃないか！

「ここで死んでたまるか！」

俺は黒い鎌を手にはストラクシヨンに斬りかかる。

「何っ！？」

デストラクシヨンは驚きながらも鎌の斬撃を受ける。
そこでようやくデストラクシヨンが顔を歪める。

「黒い鎖鎌か。やはり面白い」

「ええええええい！」

歪めた顔もすぐに笑った顔になる。

俺は鎌で牽制し、剣を拾う。

「白い剣と黒い鎖鎌、あの方にソックリだ」

あの方？ 誰の事を言っているのだろう。

「なるほど、コイツが力の片方か」

「一人で納得してんじゃねえよ！」

一人で納得しているデストラクシヨンに剣で斬りかかる。
しかし、防がれても終わらず、鎌で斬りかかる。
剣は防がれたが、まだ鎌がある。

鎌で斬りかかると、デストラクションの大剣が意図も簡単に折れた。

「何っ！？」

「何、一人で納得してんだよっ！」

「貴殿にはまだ早いことだっ」

「この野郎っ！」

腹を立てた俺は連続で斬りかかる。
それに対し、デストラクションは衝撃波で迎え撃つ。

距離を離れたら、デストラクションが持っている銃が厄介だな。

そんな事を考えていると、

「貰ったあっ！」

デストラクションは力一杯の拳で殴りつける。
当たる瞬間後ろに跳んだが、衝撃波に飛ばされる。

「はははははは！」

デストラクションはここぞとばかりに銃を撃ってくる。
俺はそれを躲して、走り出した。
デストラクションはそれを追って、銃を乱射。

「ちい！」

俺は走って躲し続けていると、魔人族が持っていた銃を見つけた。俺はそれを拾ってデストラクションに向かって撃つ。

「このっ！」

デストラクションはそれを躲し、大きな銃を撃ってくる。互いに、撃っては躲すの繰り返しだった。

「ははははは　　ん？」

突然、デストラクションの連射が止む。

弾切れだな。

同時に俺の銃も弾が切れる。

俺もデストラクションも銃を投げ捨てると互いに突っ込んでいく。

「「うおおおおおー！！」」

俺は剣を振りかぶり、デストラクションは衝撃波を乗せた拳を振る。う。

「デストラクションヨヨヨン！！」

「能天使いいー！！」

すれ違い様に振り抜く。

デストラクションの拳に乗った衝撃波に体が軋むが、確かにデストラクションを斬ることができた。

「ぐううう！」

だが、まだ浅いようだ。

すぐに俺は鎌を手に出し、デストラクションの胸に突き立てる。

だが、デストラクションも拳を振るい、俺の体に衝撃波を与えた。

「がはっ！」

血を吐くが、構わず鎌を持つ手に力を込める。

鎌は深く突き刺さり、やがてデストラクションが動かなくなる。

口元は笑ったままで。

「はぁ、はぁ　　いつっ」

肋骨が何本かいつてるなこりゃ。

エンジェルズの皆が俺の仮の名前を呼びながら駆け寄ってくる。

戦いが終わったのだらう。

そっか、終わったのか

目の前が白くなる。

意識が　　。

第十二話『白髪ドレスの少女』

「ん」

ぼやけた意識が段々、ハッキリとしてくる。
病室のベッドの上のようだ。

そうだ、確かデストラクションと戦って　　えっと？

そんなことを考えていると、体の腹部が妙に暖かい事に気付く。
まだうまく動かない体で、首を傾ける。
すると、モニカが座ってため息を付いていた。

「はあ」

モニカの表情は暗い。

「モニカ？」

「あ、久也。起きたんだ」

俺が話し掛けると、モニカの顔が少し晴れたような気がした。

「何してんだ、お前」

「久也が怪我したって聞いたから」

心配してくれていたのだろうか。

「
ありがとう」

俺が礼を言くと、モニカは「えっ？」と驚いた表情をする。
少しして、モニカは慌てて立ち上がる。

「じゃ、私次の授業行くから」

そう言つてモニカは足早に病室から出ていってしまった。

「
ふう」

まだ疲れが取れていないのか、眠くなってくる。
もう少し寝てても大丈夫だろう。

「青い青い空を見上げ、俺は

「復活ー！！」

と叫んだ。

「ちょっと、静かにしてよ！」

町の商店街の道のと真ん中、俺は元気いっぱい歩いていた。
怪我から回復した後、モニカに休日にショッピングに行こう、と
誘われて外に出ていた。

「ほら、行くわよ?」

「おう!」

元気よく返事をして二人で歩いていった。

「ふう、疲れた」

「だいたい、そろったわね。荷物持ちありがとう、久也」

午後、買い物物の荷物持ちとして、モニカの買い物に付き合わされた俺は、ようやくベンチに座ることができた。

復活の勢いで元気100倍が一気に0.5倍になった。

「なんか、飲み物買ってこようか?」

「え? ああ、ありがとう」

そう言っただけでモニカは走っていった。
すぐに戻ってくるだろう。

だが、数分後。

「遅いな」

飲み物を買ってくるだけで何をしているのだろうか。
ちよつと行った所に自販機とかがあるだろうに。

「探しに行くか?」

立ち上がろうとすると、右肩に重みを感じた。
見るとそこには女の子が眠っていた。

老いてなった白髪ではなく、天然のきれいな白髪。

風で靡く髪からは仄かに良い香りがし、人並み外れた魅力がある
美少女。

外見から推定される年齢は俺やモニカより、一つ二つ位程下だろ
う。

場違いな黒い西洋風のドレスを着ている。

「ん すう」

気持ち良さそうに寝ている様は、最高級に可愛い。だが、

誰だ？

とびつきりの美少女を前に いや、横にして思ったことはそ
れだった。

「すう ふふふ」

どんな夢を見ているのか、嬉しそうに笑う。
ずっと、見ていたいと思うがそうはいかない。

「おい」

少女の肩を揺らす。

「ん？ すう」

一度目を薄く開けるが、すぐに目を閉じる。
二度寝かよ。

「おい、起きろ」

「ん？ すう」

先程と同じ事を繰り返す。
これでは、起きそうにもない。
この子には悪いが一回どけて

「久也ー！」

タイミングが悪い事に、モニカが戻ってきた。
モニカは走ってきて少女を見ると、

「ねえ。誰、その子？」

怖い！
教官が本気でキレた時よりも怖い！

「ねえ、久也？」

モニカの目は『誰、その子？』というメッセージを訴えてきている。

「いや、この子は さつき」

「ん。あ、起きたのね。お兄ちゃん」

「「は？」」

少女はいきなり起きたかと思うと『お兄ちゃん』と言った。しかも、その可愛い笑顔を俺に向けて。

誰だか本当に知らないけど、その笑顔は今じゃまずいって！

「ひーさーやー？」

目の前には鬼、いや堕天使、それより悪魔か？
物凄い血相のモニカが俺を睨んでいる。

「どういうことかしら？」

モニカの目はすでに無の視線と化していた。

「どうしたの、お兄ちゃん。その人誰？」

「いや、それは君に聴きたい」

少女はキョトンとしたかと思うと、納得したような顔をする。
すると、少女はベンチから立ち上がると、俺たちの前に来て、ドレスのスカートを少し持ち上げ、礼儀良く頭を下げる。

「はじめまして、お兄ちゃん。私はリーゼロッテ・クシュヴェントナー。以後、お見知り置きを」

「へー、リーゼロッテちゃんかー。で、久也。どういう事？」

「俺も知らないって。お前が飲み物買いに行った後、いつの間にかいたんだよ」

モニカはふーんと考えるとリーゼロッテに歩み寄る。
すると、モニカはリーゼロッテに耳打ちをする。

「いいえ、ただ二人で寄り添って眠っていただけですよ?」

「おい、モニカ! 何を聞いたんだ!？」

「久也は黙ってて!」

俺とモニカの声がしばらくその場に響いていた。

「ねえ、お兄ちゃん」

「ん?」

しばらくになってモニカと騒いでいた俺は、リーゼロッテに話しかけられる。

「ここで、騒いだと他の人に迷惑だと思っただけど」

「「あ」「」

俺達は公園で騒いでいた事に気付いた。
通行人が俺達の事をじろじろと見ている。

「あ、お迎えが来たから私帰るね。また今度遊ぼうね、お兄ちゃん」

「えっ?」

リーゼロッテは言い終えるとそこから立ち去った。

「何だったの、あの子？」

「さあ？」

第十三話『笑う小悪魔』

「ふあ」

「おい！」

バシンッ！

欠伸をしているところを教官に叩かれる。
その拍子に目が覚める。

「はい！ すみません！」

「まったく、もう一回作戦の説明をするぞ」

そうだ、今は新しい作戦の説明を聞いている所だった。
デストラクションに受けた傷から回復して一週間がたった。

「今回の作戦は大陸の南の方にいる獣人族に魔族との戦闘に味方として介入してほしいと要請することだ。しかし、獣人族はあくまで獣人。我々魔族や魔族のように技術が発展しておらず、通信手段は手紙か直接話をしに行くしかない。どちらにしろ歩くしかない。そこでEXCALIBURの上層部はエンジェルズに獣人族の元へ行ってもらうことにしたい。なぜなら、獣人族の所へ行く道には魔族が展開しているからだ。しかし、AIGISの戦力であるエンジェルズをすべて使う訳にはいかない。よって、今回の作戦はエクシア、エリザベス、アデル、風花、ジャック、エミリーの六人で行ってもらう」

「獣人？」

獣人とはあれか？ 猫や犬、狐等の耳と尻尾がある奴の事だろ？
それにしても、六人だけか。

「そう、獣人だよ？」

アデル先輩は喜んでいる様子だ。

「アデルは獣人が好きなんですか？」

するとアデル先輩は嬉しそうに話始める。

「そうだよ。特に狐耳の子がいいね。フワッフワのモッフモッフの尻尾がまた」

「話を進めるぞ？」

「はい」

が、すぐに教官に制止された。

「では、誰か質問はあるか？ いないな？」

教官は有無を言わず話を切り上げた。

「へえ、獣人ね」

作戦に必要な物を買いに武装開発部にきていた俺はモニカについていってもらい、作戦について話していた。

作戦について話すとモニカは獣人という言葉に反応した。

「モニカも獣人好きなのか？」

「ううん。でも、確かにアデル先輩の言った通り可愛いと思うわ」

俺が見に来たのは拳銃だった。

デストラクションとの戦いから、ライフルが使えなくなった時に予備の銃を持っていた方が良いと思ったからだ。

だが、開発部はたくさん銃を開発しているため、どれがいいかわからない。

モニカにも手伝ってもらってみるが、さっぱりだ。

「もし、獣人に会ったらさ、耳か尻尾触らせてもらってきなよ。感想とか聞かせて？」

何だかんだ言ってもモニカも獣人が好きなようだ。

「選んだかい？」

モニカと話続けていると、開発部の人が様子を見に来た。

俺はまだです、と言うと開発部の人は一つの拳銃を持ってきた。

「これは？」

「デザートイーグル・50AEっていう拳銃です。全長269mm、全高149mm、重量2053gで、通常の6インチモデルの他に10インチ、14インチの長銃身型もありますよ。我々のおすすめの拳銃です。ちゃんと魔装型ですよ」

デザートイーグル・50AEか。

拳銃の事は良くわからんが、おすすめなら信頼できそうだ。

「じゃあ、これにします」

「はい、ありがとうございます」

俺は準備を済ませた後、モニカと別れて作戦のメンバーと合流した。

アデル先輩はカメラや猫じゃらし、ボールなど、おおそ作戦には関係の無い物を持っていた。

「じゃあ、行こうか！」

アデル先輩は真剣なようだが、動機が不純そうだ。

「はーやく、狐さんにあーいたーいなー」

アデル先輩は変な歌を歌いながら道を歩いている。

「緊張感がないですね、アデル先輩は」

「こういう人ですから」

風花先輩は何故かお弁当を持ってきている。

この人も緊張感があるとは言えないと思う。

初めて会った頃はおろおろしていたが、今では慣れたようだ。

「……っ」

「……」

それに対してエミリーの方はまだ、俺の事を怖がっているようだ。

「……なんでだ？」

「やはり、妹に何かしたんではあるまいな？」

「んな事ねえって」

以前に聞いてみたものの、怖がって教えてくれなかった。

ただ、闇がどうかと言うことだけがわかってる。

「ねえ、エミリー？」

「……ひえー！」

話しかけた瞬間、エミリーはサササッとエリザベスの後ろに隠れてしまう。

何がいけないのだろうか？

「獣人の村まで、どれくらいあるんだ？」

ジャックが面倒くさそうに問う。

俺も同じことを思っていた。

結構歩いたぞ？

「まだまだ、ありますよ。行き帰りで一回ずつは野宿することになりますから」

何と言いましたか、風花先輩！？

一回ずつの野宿……なんと！？

「なら、夜番はどうします？」

夜番、これは大切だ。

俺達が獣人族の村に行くのは、魔人族の部隊が展開している所を通るから。

もし、野宿中に発見されて奇襲なんてされたらどうしようもない。

「順番で良いと思いますよ。初めは私がやりますから……」

「なら、その次は私と妹がやりましょう」

「じゃあ、次は俺がやります」

女子ばつかにやらせるのはどうかと思うからな。

その後、全員で話し合った結果。

風花先輩、ホワイ特姉妹、俺、ジャック、アデル先輩の順になった。

ホワイ特姉妹は一緒にいたいようだ。

「隊長、二時の方向に敵部隊らしき影が……」

獣人族の村から少し離れた場所に魔族の小隊が展開されていた。
隊員は五人と少ない。

「ふん。この感じ、前にも感じたことあるね。向こうはこっちに
気付いてるのかしら？」

「いえ、まだだと思います」

隊長と呼ばれたのは小さな少女。

久也が先日会った人物、リーゼロッテ・クシュヴェントナー。

先日と同じく、黒い西洋風のドレスを着ているが、表情が別人の
ようだ。

ふふっ、と笑う顔は美しいものの、どこか邪悪な雰囲気漂わせて
いて、まるで小悪魔のような笑いだ。

「さて、どんな再開がいいかしらね。

……………お兄ちゃん」

第十三話『笑う小悪魔』（後書き）

G a t eの方で嫁神というキャラクターのイラストを書きました。
よかったですら見てください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6184y/>

『SWORD OR SCYTHE』

2012年1月5日23時50分発行